

病弱特別支援学校における卒業・転学後の支援に関する研究 —卒業生・転学生へのアンケート調査を通して—

川池 順也 東京都立村山特別支援学校

橋本 創一 東京学芸大学教育実践研究支援センター

要 旨：現在、医療の進歩と共に病気の子どもは、病弱者を教育の対象とする特別支援学校だけではなく、地域にある通常の学級で教育を受けることが多くなっている。特に、病弱特別支援学校に在籍した者が、地域にある通常の学校に転学することが多く、支援の引継ぎの重要性が指摘されている。また、病気のある児童生徒(当事者)が、自身に合った支援や手立ての導入とその継続について、転学・進学などの環境的变化の中で、どのように悩み考えているかということ把握することも必要であろう。本研究は、東京都内X病弱特別支援学校から、地域にある通常の学級に転学・進学をした当事者に対する調査を実施し、①今後の病弱特別支援学校における進路指導及びアフターケアの在り方、②通常の学級に対する病弱特別支援学校のセンター的機能による支援活動について、整理して検討を行うことを目的とした。調査結果から、病弱特別支援学校が実施する少人数のきめ細やかな指導による授業・進路指導、教師による個々に対する声かけなどの心理的なケアが当事者にとって有用であることが明らかになった。同時に、こうした個別の対応や指導の必要性について、転学・進学先の学校に対して積極的な引き継ぎの方策を今後は模索していくことが求められた。

Key Words： 病弱特別支援学校，当事者，アフターケア

●

I. 問題の所在と目的

病弱特別支援教育は、医療の進歩や社会のありようによって大きく変化する教育である(全国特別支援学校病弱教育校長会, 2012)¹⁾。1960年代前半は、結核罹患児が大きな割合を占めていたが、60年代後半には激減し、代わってぜん息が増加した(山本, 1997)²⁾。その後、虚弱体質児等のための転地療養、糖尿病・腎炎・ネフローゼ・気管支ぜん息・アレルギー疾患・肥満等の児童生徒への教育の時代を経て現在に至っている。

現在は医学の進歩や地域医療の進展によって結核患者は殆どいなくなり、同様に気管支ぜん息やアレルギー・糖尿病の子ども達も適切に医療機関と連携すれば家庭で治療しながら地域の小・中学校での教育が可能時代となり、病気の子どもは、病弱者を教育の対象とする特別支援学校だけではなく、地域の小・中学校に

ある病弱・身体虚弱特別支援学級や通常の学級で教育を受けることが多くなってきている。

病弱特別支援学級の児童生徒数に関しては、1975(昭和 50)年頃をピークに一時減少しているが、これは 1979(昭和 54)年の養護学校義務制実施に伴い、病弱の養護学校の設置が進むとともに、一部の病院内の特殊学級が養護学校に移管されたことや、入院する児童生徒数の減少・入院の短期化など複数の原因が考えられる。1989(平成元)年頃からは 1,500 人前後で推移し、それ以降、学級数は増加している。2011(平成 23)年には、2,270 人となっている。学級数については、1989(平成元)年頃までは減少していたが、それ以降、児童生徒数は増加し、2011(平成 23)年は、1,271 学級となっており、この 15 年間で倍以上に増えている。

全国病弱虚弱教育連盟が 2009(平成 21)年に実施した全国実態調査によると、病院にある特別支援学級の数は 255 学級であり、小・中学校内に設置された学級は約 950 学級と推定され、

これは、病弱特別支援学級の約 80%にあたる。本調査から、小中学校においては、感染症や紫外線対策が必要など、他の児童生徒と同じ教室で一緒に学習することが困難であったり、医療的ケア等を必要とする児童生徒などが増加していることが示唆される。

他の特別支援教育の対象の児童生徒と比較して、病弱児の特色として挙げられるのは、外見上、また、行動の上でも健常児と変わらないことが多く(高木, 1983)³⁾、いわゆる「障害児」といった印象を受けることが少ないこと(村上, 1993)⁴⁾、また、完全治癒が望める疾患においては、将来全くの健常児として生活することが期待できるということがある(谷口, 2009)⁵⁾。

このように、病弱教育は医療の進歩や時代とともに大きく変化するという面と、病気の状態が改善されると地域の通常の学級に戻り、通常の教育課程に則り学校の学習や生活を送っていくという児童生徒への支援を受け持つという特性を持ち、病弱教育を担当する教員には、多様な場での多様な疾患への弾力的な取り組みが求められているといえる。

さて、全国の特別支援学校は、センター的機能として、学校教育法第 74 条における「特別支援学校においては、第 72 条に規定する目的を実現するための教育を行うほか、幼稚園・小学校・中学校・高等学校又は中等教育学校の要請に応じて、第 81 条第 1 項に規定する幼児・児童又は生徒の教育に関し必要な助言又は援助を行うよう努めるものとする」と規定されている。

さらに、特別支援学校学習指導要領解説では、1.小・中学校等の教員への支援機能、2.特別支援教育等に関する相談・情報提供機能、3.障害のある幼児児童生徒への指導・支援機能、4.福祉・医療・労働などの関係諸機関との連絡・調整機能、5.小・中学校等の教員に対する研修協力機能、6.障害のある幼児児童生徒への施設設備等の提供機能を根拠として、地域の小・中学校等に対して、通常学級の教員等への助言・援助や保護者等に対する教育相談等を担うとされている。

このような中、猪狩・高橋(2001)⁶⁾や猪狩(2003)⁷⁾は「病気療養児の多くが通常学級に在籍しているという実態に対し、その現状に応じた対策が提起されていない点で、なお不十分さを残している」と述べ、また、「子どもの有する特別な教育的ニーズに気づき、必要な援助を明らかにして実践する特別ニーズ教育のシス

テムを通常学校・学級の中に確立することが不可欠である」としている。

しかし、今なお全国の病弱特別支援学校がセンター的機能として、取り組んでいる通常学級へのコーディネーション機能の実態が明らかになっていないという課題がある。

また、それ以上に病気のある当事者すなわち、病弱特別支援学校から、地域の通常の学級に転学や進学をした児童生徒が、病弱特別支援学校の在籍中や転学先や進学先で有用であったと考える手立てについては、明らかにされていない現況にある。

よって、本研究においては、都内 X 病弱特別支援学校から、地域の通常の学級に転学や進学をした当事者に対する調査を行い、①今後の病弱特別支援学校における進路指導及びアフターケアの在り方について検討すること。そして、②地域の通常の学級に対する病弱特別支援学校におけるセンター的機能の在り方について、整理して検討を行うことを目的とした。

● Ⅱ. 方法

1. 調査対象

東京都内にある X 特別支援学校から、地域の中学校・高等学校・大学・専門学校に進学及び転学した卒業生及び転学生の計 29 名を対象とした。内訳は男性が 15 名、女性が 14 名であり、調査時の年齢は、18 歳～38 歳であった。

調査方法は、調査者自身による対象者への半構造化面接及び郵送による 5 件法を中心とする自由記述を含む、質問紙調査を実施した。

なお、倫理的配慮として、調査においては、X 特別支援学校校長の了解のもとに、校長ならびに調査者の連名による依頼書により本人及び保護者の許可を得て回答を得た。

2. 調査期間

2012 年 7 月 1 日から 2012 年 9 月 1 日とした。

3. 調査内容

主な質問項目は、「X 特別支援学校の在籍中に感じた支援について」「転学先や進学先で感じた支援について」「今現在、X 特別支援学校で受けた教育について感じること」とした。そして、「今 X 特別支援学校に希望すること」の自由記述を求めた。

Ⅲ. 結果

今回の調査は、実際にX特別支援学校を卒業及び転学生に対しての半構造化面接により実施したため、対象数は29名であったが、当事者一人ひとりに調査の目的や質問の内容について、丁寧に説明を行い、調査者が当事者の発言を整理しながら、調査を実施することができた。よって、回収率は100%となった。

「X特別支援学校の在籍中に感じた支援について」は、当事者がX特別支援学校に在籍した当時のことを想起しながら、回答する質問で、調査の主な結果は、Fig.1の通りとなった。

「質問(1)クラスが少人数であり、落ち着いて学校生活を送ることができた」については、「そう思う」が20名、「やや思う」が5名、「どちらでもない」が3名、「あまり思わない」が1名、「思わない」が0名であった。

「質問(2)担任の先生が声をかけてくれたり、相談にのってくれたので、安心して学校生活を送ることができた」については、「そう思う」が16名、「やや思う」が8名、「どちらでもない」が4名、「あまり思わない」が0名、「思わない」が1名であった。

「質問(3)寄宿舎で生活リズムを整えることで、気持ちよく生活を送ることができた。」については、「そう思う」が18名、「やや思う」が6名、「どちらでもない」が4名、「あまり思

わない」が1名、「思わない」が0名であった。

「転学先や進学先で感じた支援について」は、当事者がX特別支援学校から地域の中学校に転学した時、または高等学校・大学に進学した際のことを思い出して、記入を依頼した。調査の主な結果は、Fig.2の通りの通りとなった。自由記述については、9件の回答を得た。

「質問(4)転学先・進路先の授業についていくことができた」については、「そう思う」が10名、「やや思う」が12名、「どちらでもない」が4名、「あまり思わない」が3名、「思わない」が0名であった。

「質問(5)新しい友達ができる」については、「そう思う」が19名、「やや思う」が5名、「どちらでもない」が4名、「あまり思わない」が1名、「思わない」が0名であった。

「質問(6)悩みごとを相談できる人がいた」については、「そう思う」が16名、「やや思う」が5名、「どちらでもない」が6名、「あまり思わない」が1名、「思わない」が1名であった。

「質問(7)新しい学校でも病気のことについては、学校に理解をしてもらっていた」については、「そう思う」が12名、「やや思う」が9名、「どちらでもない」が5名、「あまり思わない」が1名、「思わない」が2名であった。

「今現在、X特別支援学校で受けた教育について感じる」とは、当事者が現在X特別支援学校での生活を振り返って感じることを答える質問であった。調査の主な結果は、Fig.3の

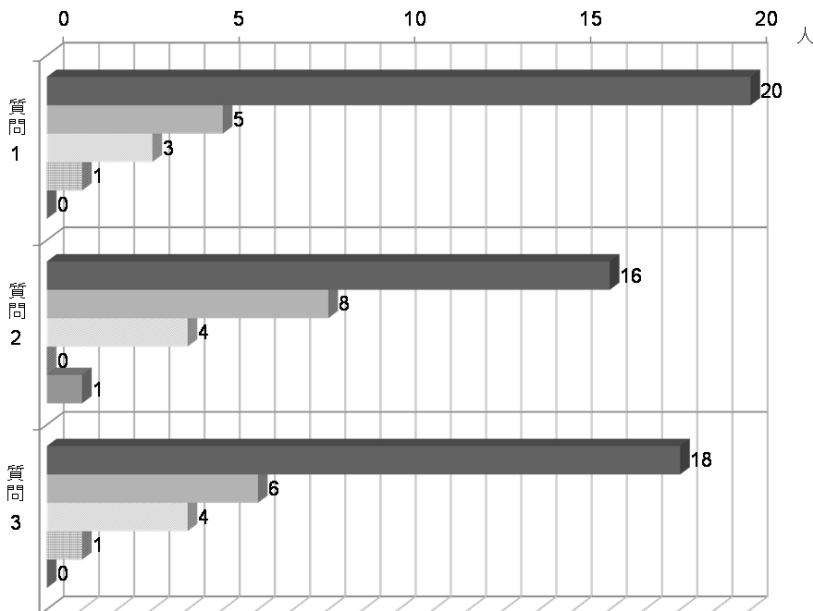


Fig. 1 X特別支援学校の在籍中に感じた支援について

通りとなった。自由記述については、6件の回答を得た。

「質問(8)学校で受けた授業は身に付いたと思う」については、「そう思う」が12名、「やや思う」が11名、「どちらでもない」が5名、「あまり思わない」が0名、「思わない」が0名であった。

「質問(9)先生が話してくれたことや相談してことが生かされている」については、「そう思う」が14名、「やや思う」が11名、「どちらでもない」が4名、「あまり思わない」が0名、「思わない」が0名であった。

「質問(10)X特別支援学校にいたことで、それまでの不安が取り除かれ、安心して学校生活を送ることができた」については、「そう思う」が21名、「やや思う」が4名、「どちらでもない」が1名、「あまり思わない」が1名、「思わない」が2名であった。

IV 考察

1. X特別支援学校の在籍中に感じた支援について

この質問は、当事者がX特別支援学校に在籍した当時のことを想起しながら、回答する質問であり、面接実施中も、当事者自身も振り返りがしやすい質問であった。

結果、概ね、どの質問にも、「そう思う」と

回答したが、最も「そう思う」の回答数が多かったのは、「クラスが少人数であり、落ち着いて学校生活を送ることができた」の20件であった。のちの、「転学先や進学先で感じた支援について」の自由記述において、「少人数制の授業が良かった」との記述や「少人数で質問しやすかった。逆に先生からも聞いて頂けて有り難かった」との記述があるように、少人数の学級集団において、先生と児童生徒や児童生徒と同士が授業において、コミュニケーションを深めることが有用であることが示唆された。

具体例として、面接においては、「社会科におけるプロジェクトを使用した写真や図について話し合った授業」や「ぜん息の改善のため、吹き矢を使用して息をコントロールした自立活動の授業」という意見があった。

また「寄宿舎の生活で、しっかりと食事をとることができた」「給食がおいしくて好き嫌いが無くなった」と給食や食事について肯定的に答える意見もあった。

2. 「転学先や進学先で感じた支援について」

この質問は、当事者がX特別支援学校から地域の学校に転学及び進学した際のことを思い出して回答する質問で、面接の様子からは、当事者がその当時の心情について想起することが難しいことが伺える質問であった。その中でも「思う」が最も多い質問は、「新しい友達が

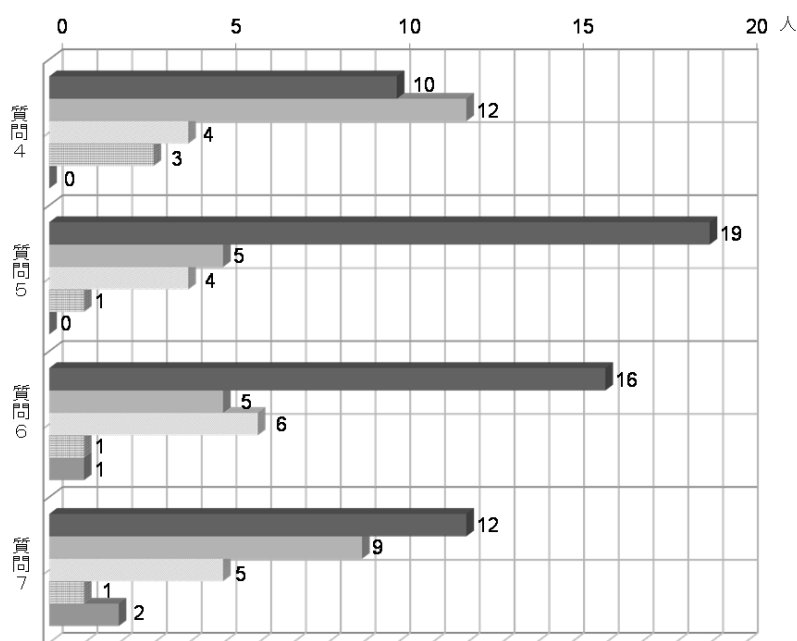


Fig.2 X特別支援学校から転学・進学先で感じたことについて

できた」の19件であった。

反対に全ての質問において、「あまり思わない」「思わない」と答える層が「X特別支援学校の在籍中に感じた支援について」と比較して多いことも分かった。

とりわけ「質問(6)悩みごとを相談できる人がいた」については、「どちらでもない」が6件、「あまり思わない」が1件、「思わない」が1件であり、質問「新しい学校でも病気のことについては、学校に理解してもらっていた」においても、「どちらでもない」が5件、「あまり思わない」が1件、思わないが2件と否定的に捉える層が多くなった。

そこで、この2つの質問について、「思わない」と回答した当事者3名について、他の質問との相関を検討した。

結果は、年齢層は、10代が1名、30代が2名であった。回答については、「転学先や進学先で感じた支援について」は、3名全員が他の質問を「思わない」とは回答しておらず、他の質問との有意な相関の関係は見られなかった。

しかし、「今現在、X特別支援学校で受けた教育について感じること」の「質問(10)X特別支援学校にいたことで、それまでの不安が取り除かれ、安心して学校生活を送ることができた」について、「思わない」と答えた層が2名おり、改めて特別支援学校における個々における相談支援とニーズの検討を行う必要があること

が示唆された。

また、「あまり思わない」「どちらでもない」と回答した層については、他質問との有意な相関の関係は見られなかった。

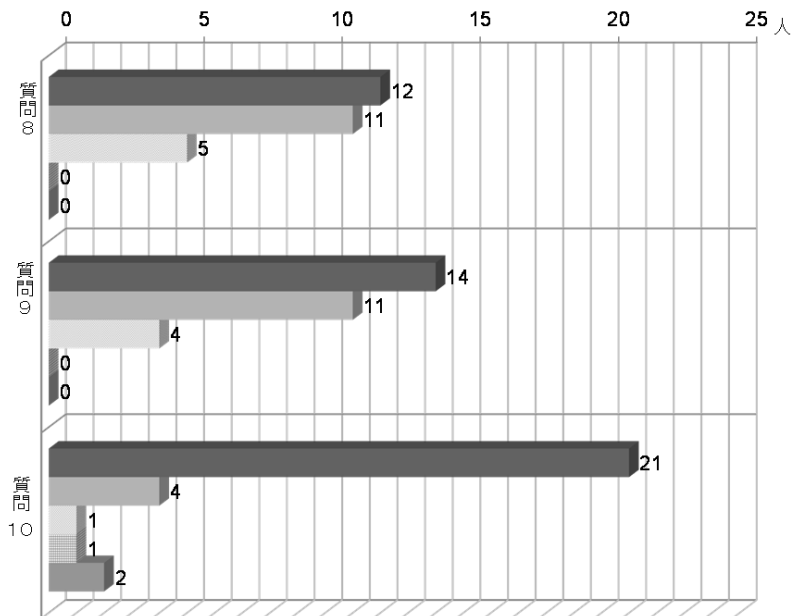
自由記述においては、「少人数制の授業が引き続き自分には必要であった」「転校してもX特別支援学校に相談に戻ると、受け入れてくれたことが嬉しかった」という意見がみられた。

以上のことから、病弱特別支援学校が、児童生徒の転学や進学に当たっては、特別支援学校に在学している間に、進路指導として、当事者が悩みごとを相談できる人材やシステムを知るための支援を行うこと、及び特別支援学校がアフターケアの体制を構築しておくことの重要性が示唆された。

とりわけ、「新しい学校のクローラーが教室ごとの調整ではなく、全体での調節だったので、体温調節が難しい私としては、もう少し涼しくしてもらえたらと思った」という当事者の自由記述もあり、病弱特別支援学校が進路先に行う引き継ぎとして、丁寧な説明が必要であった配慮事項といえよう。

3. 「今現在、X特別支援学校で受けた教育について感じること」

この質問は、当事者が現在X特別支援学校での生活を振り返って感じることを答える質問であり、「X特別支援学校の在籍中に感じた支



* 質問8に無回答1を含む

Fig. 3 今、現在X特別支援学校での生活を振り返ってについて

援について」と同様に現在率直に学校に対する思いを答える内容であったことから、面接中も比較的当事者が答えやすい様子であった。

「質問(8)学校で受けた授業は身に付いたと思う」については、「あまり思わない」「思わない」と否定的に回答する層がいなくなり、肯定的に答える層が多くなった。当事者との面接では、体育の授業について「体を動かす楽しさを知った」「卓球・フリスビー・けん玉等を経験することができ、とても嬉しかった」と答える意見があった。

よって、地域の通常の学級に対する病弱特別支援学校におけるセンター的機能として、病気がある児童生徒も通常学級において共に取り組むことが可能である体育の活動を授業実践例として、伝えていくことが有用であることが示唆された。

また、少人数で丁寧に英語のローマ字の読み書きや学習内容を精選して提示するなどのX特別支援学校の授業者による支援によって、「基礎的な学力はついた」と自己肯定感を高めることに繋がっていることも示唆された。面接中にも、「授業で確実に分かっているか聞いてくれるのが良かった」「意見を出し合えるような授業が良かった」という当事者の回答があった。このような、一人ひとりの理解度を確実に確かめることや意図的に友だち同士の意見を聞く機会を設定するなどの授業者による手立てが有用であることが示唆された。

以上の結果から、個々の病気の実態に応じて必要な支援を行うという進路指導の在り方を改めて確認することが有用であることが分かった。

最後に、「今X特別支援学校に希望すること」の自由記述については、12件の「X特別支援学校の存続の希望」があった。また「就職活動やその生徒への精神面でのケアなどに力を入れてほしい」という進路と心理面に関するアフターケアの充実を求める記述が複数みられた。

以上の結果から病弱特別支援学校において当事者は、進路指導として、転学や進学に備えて通常の中学校や高等学校との交流を積極的に行ってほしいという要望や、中長期的には、就職という将来を見据えた指導を求めていることが示唆された。

また、「質問(3)寄宿舎で生活リズムを整えることで、気持ちよく生活を送ることができた」で、多くの寄宿舎の有用性について回答を得たことを示す通り、寄宿舎教育の役割についての回答も得た。小野川(2013)⁹⁾が「長期的に学校

と医療が連携し、生活規制を必要とする病弱児にとって寄宿舎併設の特別支援学校の意義は大きいと思われる」としたように、自由記述では、単に存続を求めるのではなく、「都内でも自然が豊かな地」での存続の希望があったことは、ぜん息やアレルギー等の身体疾患がある児童生徒への教育を行う病弱特別支援学校特有の回答であると考ええる。

以上のように、地域の通常の学級に転学や進学をした当事者に対する調査を通して、①今後の病弱特別支援学校における進路指導及びアフターケアの在り方及び②地域の通常の学級に対する病弱特別支援学校におけるセンター的機能の在り方について、整理及び検討を行った。

そして、検討の結果から、改めて病弱特別支援学校が行っている少人数でのきめ細やかな指導による授業や進路指導と教師による個々に対する声かけなどの心理的なケアが有用であることが分かった。

今後の課題としては、①病弱特別支援学校からの積極的な転学・進学先の学校に対する丁寧な授業の手立てを中心とする引き継ぎの方法を模索していくこと②進路指導として、当事者が悩みごとを相談できる人材やシステムを知るための支援を行うこと③特別支援学校がアフターケアの体制を構築していくことが挙げられる。

例えば、当事者同士が直接交流する会を設定することや日常的な繋がりを持つためのインターネットを活用したソーシャルメディアサービスの提案などが考えられる。

谷口(2014)⁹⁾が、「病弱児の将来的な自立を視野に置いて療養中の教育を考える必要性が高まっている。病弱児のキャリア発達支援研究は、まさに現在取り組むべき喫緊の課題と言える」と述べているように、病弱特別支援学校ならではの、当事者の声を反映したアフターケアの充実を検討していくことが、今後さらに重要になってくると考える。

文 献

- 1)全国特別支援学校病弱教育校長会(2012):特別支援学校の学習指導要領を踏まえた病気の子どものガイドブックー病弱教育における指導の進め方ー。ジアース教育新社。
- 2)山本昌邦(1997):病弱教育の変遷と展望。発達障害研究 18(4), 280-284。
- 3)高木俊一郎(1983):慢性疾患児に対する精神心理的ケア。特殊教育学研究, 21(1), 48-51。

- 4)村上由則(1993)：慢性疾患の病状変動と自己管理(7)－健常児では問題とならない状況・場面でのトラブルエピソード. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, 699.
- 5)谷口明子(2009)：長期入院児の心理と教育的援助院内学級のフィールドワーク. 東京大学出版会.
- 6)猪狩恵美子・高橋智(2001)：通常学級在籍の病気療養児の問題に関する研究動向：特別ニーズ教育の視点から. 東京学芸大学紀要. 第1部門, 教育科学 Vol.52, 191-203.
- 7)猪狩恵美子(2003)：通常学級在籍の病気療養児の長期欠席問題と特別ニーズ教育. 日本特殊教育学会第41回大会論文集, 696.
- 8)小野川文子(2013)：特別支援学校の寄宿舎教育に関する研究の動向と課題. 特殊教育学研究, 50(5), 451-461.
- 9)谷口明子(2014)：病弱児のキャリア発達支援(1)－教員から見た社会的自立のために“つけたい力”とは－. 日本特殊教育学会第52回大会論文集, P1-D-9.

(受稿 H26. 10. 15, 受理 H26. 11. 10)